Hideki Sugiyama

仰木彬

AKIRA OHGI

BASEBALL FINAL 1996

永谷脩一文
text by Osamu Nagatani

栄光の采配。

［マジックを解く］

V字になった白いユニフォームが神戸の夜空に高々と舞った。「ペナントレースに続いて神戸で胴上げを決められたというのは、この上ない喜びです。選手がたくましさを身につけてくれた」。お立ち台の上で、日本一インタビューを受ける仰木監督は、右手にしっかりとウイニングボールを握り締めていた。思えば長い道程だった。'89年の巨人との日本シリーズでは、開幕3連勝後の4連敗という悪夢を経験した。昨年は、野村監督のデータ野球に完膚無きまでに打ちのめされる。そして今シリーズは7年前に苦汁をのまされた巨人を相手に、3連勝でスタートするが第4戦を落としたことで「また'89年の再現か」というムードが漂ったのも事実だった。マジックと言われ続けてきた仰木采配とは一体何だったのか？チームを優勝に導いた魔術を今、解き明かす。

オリックスの監督に就任して、3年目で念願の日本一を達成した仰木彬監督。昨年の日本シリーズでは、ヤクルトの情報操作に翻弄されたが、今年は、巨人・長嶋監督を相手に堂々と渡り合い、横綱相撲を見せてくれた。

その戦法、戦術は驚くほど正攻法であり、選手の使い方は理に適った起用であった。世に言う、「仰木マジック」を期待して、日本シリーズ観戦に来た、セ・リーグの野球しか見ていない評論家たちは、その正攻法の野球に戸惑いを隠せなかった。

シリーズ開幕前、第1戦の先発の大方の予想は、後半戦負けなしのフレーザーか、球に力のある野田浩司だった。巨人の斎藤雅樹に対抗するには、その方が無難、2戦目にエースの星野伸之をもってくるという意見が多かった。常に相手チームを見ての起用ということになるのだが、仰木采配が正攻法だという理由は第1戦の星野の起用をみても納得できる。

「自分のチームで、シーズンを通じて一番柱になってやってきた投手で初戦を戦うのが当然だと思います。その方が星野にも自覚がでますし、チームの連帯感もでてくる。相手チームを見る前に自分のチームのことを考えました。巨人が斎藤で来ようがガルベスで来ようが関係なく、とにかく第1戦は星野だったのです」

勿論、その考えを踏襲した上で、山田コーチに任せているのだが、第1戦の星野の起用について選手会長の藤井康雄なども「一番おさまりのいい起用だったと思う」と語っている。

正攻法で戦った第1戦、初回に得点を許したものの、何とかゲームを崩さずに来た5回、走者を出したところで、落合博満を迎えて、星野から小林宏にスイッチしている。落合対策については、戦前、仰木は山田コーチ、長村裕之コーチ、岡田幸喜スコアラーを集めてミーティングをしている。結論は、「落合が出てきても、ウチの中で球の速い小林と平井正史をぶつけることで、彼を抑えることができる」というものだった。だから、仰木はここで躊躇なく小林にスイッチすることができたのだ。この継投についても仰木は語る。

「継投というのは、ウチがいつもやっているパターンですから、選手の方もそれに慣れていると思います。選手も私のやることを理解してくれているので、思い切ってやれます。選手には残り7試合終わればもう当分、野球をしなくてもいいから、とにかく悔いの残らないように戦おう、と声をかけました。シリーズでは、普段のシーズン中にやらないようなことをやっても全体がおかしくなる。だから、出来るだけシーズン中にやったことを踏襲しようと考えていました」

特に活躍の著しかった鈴木平は5試合中、4試合に登板し、3試合にセーブを上げている。巨人打線を完璧に抑えたかといえば、決してそうではない。第1戦、9回に大森剛にバックスクリーンに本塁打を打たれている。この時、鈴木は「僕がメークドラマの主役ですか、あの球は打たれても仕方がない」と開き直っていた。だから、2戦目の9回2死一塁、一打同点の場面で、落合を迎えたところでの指名に身震いしたという。

「前の日に失敗している僕を指名してもらった時、前日うまくいった平井ではなく、何でこの僕なのかと思いましたけど、意気に感じたのは確かです。あそこで、落合さんを抑えられたことで、残りの試合も自信を持って投

Jun Tsukida

おおぎ　あきら　1935年（昭和10年）4月29日生まれ。61歳。福岡県出身、身長171cm、体重71kg、東筑高校3年の夏、甲子園出場、'54年西鉄入団、現役通算成績は1328試合出場、打率.229、70本塁打、326打点。'70年から近鉄のコーチを18年間務め'88年近鉄監督に就任、'92年退団。'94年、オリックス監督に就任し、'95年にはリーグ制覇。日本シリーズでヤクルトに1勝4敗で敗れた。監督としての通算成績は1040試合で587勝426敗33分。勝率.583。

Naoya Sanuki(2)

右上、第5戦、4回1死一、三塁、井上が放った中前へのライナーを本西が好捕した瞬間。左上、審判の判定はヒット。グラブを放り投げて抗議。下、「オレたちはビデオを見て野球をしているわけではない」と返答する審判団

Kazuaki Nishiyama

げられました」と仰木の起用に感謝している。

その鈴木を仰木に薦めた山田コーチは、「僕が不安がっていては駄目だから、自信ある表情を頑張って作って進言した」と内情を吐露した。

巨人は前日、イチローに本塁打を打たれた河野博文をベンチから外していた。一方のオリックスは同じように打たれた鈴木を9回に投入したのは、なぜなのか？

「ウチはシーズン中、どれだけ鈴木に助けられたか。抑えは彼の役目なんだから、少しくらい打たれても気にすることはない。打たれたことに関しては、ゲームから少し離れていたので、カンが狂ったのかなと思いました。ただウチは、シーズンからずっと中継ぎ、抑えでやってきた。今さら、少々のことでこのパターンを変えられないという開き直りもある。それに、一度ぐらいの失敗で使うのをやめると、選手は働き場を失ってしまうじゃありませんか」

打撃については、1、2戦を振り返って、

「確かに田口壮や大島公一が成長してくれたことで、イチロー、ニールを固定することができました。ミーティングで巨人の外野陣なら、ウチの足を使えば二塁から本塁に戻ることは十分可能。だからともかく、二塁に進もうという作戦だった。ウチのバントはひとつ先の塁を取る積極策だったのです」と話す。

特に、第1戦の3個の犠牲バントはそれを如実に物語り、次打者が投手でもバントさせたことについて、

「巨人の投手からは、そんなに点がとれないと思っていた。だから、常にプレッシャーをかけ続けることの方が大事だと考えたから」と答えている。

東京ドームでの二つの勝利は、仰木自身にも、確かな手応えを感じさせてはいたが、決してそんなことは表には出さず、また、相手チームへの批判については極力話そうとせず、自分たちの野球をやるだけだという信念を貫いていた。仰木は、近鉄時代の'89年、巨人との日本シリーズで3連勝した後、4連敗を喫した苦い経験がある。移動日を振り返ってこう語っている。

「二つ勝って、神戸に戻れて、気分悪いはずがありません。ただ、'89年のことは少し思い出しました」と。

東京ドームで2連勝したオリックス。神戸に舞台を移して、地元で一気に勝負をかけたい。しかし近鉄時代の悪夢も頭の片隅から離れない。

第3戦は、ガルベスか宮本和知かで意見が分れた。オリックスナインはガルベスより宮本の方を嫌がっていた。だが、仰木はピタリとガルベス先発を当てて、オーダーを組んでいる。予告先発の有利さを最大限生かして、オーダーを組み替えてきた仰木にとって、それがない日本シリーズは不利とされていたが、的中させた理由は何だったのか？

「打者の連中は宮本の方がガルベスより嫌だと言ってました。第3戦に来る投手が、第7戦にも来ると考えた場合、宮本でいいのかなと思った。当然左投手を頭に入れながら、ガルベスを想定したオーダーを組んでいきました。終わってみればストライクゾーンの狭い小兵で、しかもストレートに強い下位打線がチャンスを作ってくれて、投手を助けてくれました。9回の頭からの鈴木のリリーフは予定していた通りでした。野田が93球も投げていましたから」と試合後に語っていたが、9回落合から始まる打線は、当然大森にまで回って来る。そこで鈴木に打ち取らせて今後に繋げていこうと思ったのはシナリオを書くのが好きな仰木らしいところであった。

だが、勝ちが見えて来た時、何か特別な仕掛けや、新聞の見出しに舞う文字を考えて、自分のシナリオを作って失敗することもよくあった。ある選手は、「また、同じミスをやるのか、オイ、オイという感じ」だと言い、別の若手の選手は「ああ、また同じことをやっているな、と思えてホッとする」と表現しているのだが……。

その兆候が見えたのは、3連勝したあとの第4戦の先発だった。'89年も第4戦の先発に、大方の予想に反して池上誠一を起用して、投手コーチの反対にあい、小野和義の先発に変えた経緯がある。このシリーズの第4戦の豊田次郎の先発はこのケースに似ているように思えたが、しかし今回の場合、キチンとした裏付けがあったので選手の方も納得していた。

テレビの中継用のケーブルを足に引っ掛けるほど、緊張していた気の小さい金田政彦と、メジャー挑戦に、心を奪われている長谷川滋利に先発を任せるよりも、一番テンポのいい投球をみせる豊田を選んだのは、次のような理由があってのことだった。

「守っている間の投球のテンポの悪さは、自分のチームが攻撃に移ったときのリズムを大きく崩すことが多いんです。この第4戦は攻撃に頼らなければならなかったのですから、一番ストライクがとれるテンポの速い投手でいくことにしたんです。ウチの打者はリズムを大切にしていますから」と仰木は言う。一見奇策に見えた豊田の先発はナインの気持ちを熟知した上での選択だった。

「3連勝した時、当然ですが'89年のことは頭をよぎりました。余計な事を言って刺激したくない（'89年の時は、加藤哲郎が巨人に対して〝ロッテ以下のチーム〟と言って巨人ナインを発奮させてしまった）、下手なことをやって相手を勢い付かせたくないと思っていました。だから喋りたくても口を貝にしてたのです」と王手をかけた瞬間の気持ちをこう表現

Kazuaki Nishiyama

Jun Tsukida

成長したこの二人の力も
優勝に大きく貢献した

している。

そして、日本一を決めた第5戦、巨人は中4日で斎藤を起用、オリックスは星野を立て、真正面からぶつかり合った。その前日、星野には、「ウチのエースとして斎藤が降りるまでマウンドにいるプライドを持て」と言って檄を飛ばしている。今年の星野といえば、13勝5敗の成績。本来、開幕投手は野田だった。雨で流れたために巡ってきた星野の出番だったが、完封勝利でスタートできた心地好さが、この成績に現れ、同時にエースとしての自覚とプライドを養うことでシーズンを乗り切ってきた。

その星野は、「相手のエースより、力が上だから、相手が降りるまでマウンドにいろ」と言われては、意地や闘志が湧き上がらないわけがない。滅多に声を掛けない仰木の檄に、星野は、「今年、最後の仕事」と思って投げたのである。

だが、4点をリードした4回に捕まる。仰木は序盤のリードで外野の守備固めにはいっている。昨年にしろ、今年にしろ、優勝が決まる試合で、外野の守備固めが一歩遅れて、本西厚博を中心に、田口、イチローの日本一優秀な外野陣を生かせずに終わっていた。その反省もあってか、藤井に代えて、本西をセンターに入れた途端、問題のシーンは起きた。

男にとって、勝負師にとっての引き際とは一体何なのか？この第5戦は、そのことを思い知らされた試合でもあった。

4回1死一、三塁の場面で、井上真二の打球はセンターに飛ぶ。前進した本西は地上スレスレで好捕、捕手高田に返球した。だが、二塁審判の井野修はアウトではなく、ワンバウンドで捕球したとしてセーフの判定を出した。

猛烈な勢いで抗議に走る仰木。「34歳になって初めてキレた」と言う本西。選手たちは監督の号令でベンチに引き揚げている。ベンチ裏に戻ってきた仰木はビデオでそのプレーを確認し、審判達にもビデオを見るように促した。

「誤りを素直に認めろ、だから巨人寄りだと言われるんだ」と仰木は叫んだ。しかし激しいやりとりの中、山田コーチに、次の投手の準備ができているかの確認をとる冷静さも、失わずにいた。

「命を賭けて判定している」と言う井野塁審の言葉に、仰木は、「よっしゃ」と大声を上げ、選手を守備に戻らせ試合を再開した。その間、わずか10分、見事な引き際だった。

仰木は後日、この10分間を振り返って答えている。

「あのプレーを機に、チームの気迫が漲ったのは確かです。済んだことで、いつまでもグチャグチャ言っても判定が変わるわけでもないし、たとえ変わったとしても後味が悪いだけ。それよりも、審判に貸しを作って試合をした方が逆に優位に立てる。損して得取れです」と言う。

判定を巡って、ノッて来るはずの巨人は逆に意気消沈、オリックスに流れが行ったのは、10分という短時間で抗議を切り上げた仰木の潔さだったのかも知れない。

「計算？　そんなことはしていません。でも引き際はいつも考えています」とポツリと言った言葉は何か凄味があった。

オリックスは伊藤隆偉の力投があり、野村貴仁、鈴木と判で押したようなリレーで勝利を決めた。5戦中、4戦でマスクをかぶり巨人打線の的を絞らせなかった高田誠は、古巣だった巨人に勝ったことに、素直に涙を流していた。

「巨人は足を使ってくるチームではない。それならば、リードの多彩な高田を使うことで彼のキャラクターを生かそうと考えました。シーズン後半からこういう起用をしてきましたが、本人もいろいろ工夫を加えながら、このシリーズでもうまくやってくれました」と高田のリードをたたえている。オリックスには中嶋聡という12球団随一の強肩捕手がいる。それをあえて、高田を起用したのは、リードの良さだけでなく、巨人を追われた者の意地に賭けたところがあったのだ。

仰木は優勝決定直後の合同記者会見で「このシリーズのターニングポイントは第1戦目だった」と答えている。そして「リーグ優勝をしたときよりも、さらに選手たちが頼もしく成長してくれた」とも言った。

仰木マジックにはまった巨人はなす術もなく、敗れ去ってしまった。思えば昨年、ヤクルトに敗れた時も、1勝するのがやっとだった。それを考えたとき、自分が使い切ったナインがなんとも大きく、頼もしく見えたことであろうか。

「まわりの人は、仰木マジックなんて言いますが、マジックなんて何もありません。正攻法でオーソドックスそのものです。今までは持久戦になると自分からこけていたチームが、今年は、相手が転ぶまで持ち堪えられるようになりました。巨人がどうのと言う前に、ウチの選手が自分の仕事をきっちりとやってくれたということです」

悲願だった日本一の栄冠を手にした仰木監督はニッコリ笑って言った。

「これで毎日酒を飲んでも、後ろ指さされないだろうな」

ちょっぴり不良で形に拘らない男が、なんとも照れ臭そうに目を細めた。

「こんなに幸せすぎて大丈夫かな」

■

Naoya Sanuki

Kazuoki Nishiyama

高田の好リードによって、巨人は貧打に終わった